

いわゆる調査地被害考に 問う民俗調査の今後 乗り越えるべき「黒子調査」

Fieldwork from Now on: Through a Reflection on
Japanese Folklore Fieldwork until Now

村上忠喜

- ①調査論不在の民俗学
- ②調査地被害考の背景にある民俗調査観
- ③「黒子調査」の功罪
- ④回想—グアテマラ民俗調査より—
- ⑤伝承の資料批判にむけて

【論文要旨】

日本民俗学の資料である伝承そのものは、資料として批判することが困難である。それというのも、伝承資料自体の持つ性格と、伝承を取り出す際の調査者の意図や、調査者と伝承保持者との人間関係など、さまざまな因子に影響を受けるからである。フィールドワークを土台とする学問でありながら、資料論や調査論の深化が阻まれていたことは不幸であり、その改善に向けての具体策を模索していくべきである。

伝承資料を批判することは、伝承資料の取り扱い方と、それを得る調査の現場を検証することに他ならない。

本稿では、まず、「調査地被害考」を手がかりとして、その考え方の背景にある民俗調査観を批判し、その調査観に基づく調査を「黒子調査」と規定する。そして、「黒子調査」の功罪を、伝承資料の今後の民俗調査・研究にいかにか活かすかについて、以下の2点を提言した。

- ①伝承を（歴史）事実ではなく解釈とする見方を徹底することで、これまで集められた膨大な資料ストックを再検討し、伝承の成立やプロセスの意味を考察し、現在につながる生活文化の再構成を目指す。
- ②調査地や被調査者と積極的に関与していくフィールドワークとそれに基づく事業を進める過程で、発生する地域からの様々なアクションを分析対象に取り込むことにより、フィールドワークの方法論的蓄積と伝承資料批判についての用意を図る。

キーワード：フィールドワーク，調査地被害，「黒子調査」，伝承資料，資料批判